

主論文の要約

青年期前期における母子の養育態度認知に関する研究

信太寿理

子どもが青年期に入ると、青年が認知する親の養育態度に変化が生じる。養育態度とは子どもと関わる際の態度であり、親の表す情緒的な雰囲気を作り出すとされている (Wolfradt, Hempel, & Miles, 2003)。養育態度認知においては、行為者側である母親の認知と、受け取る側である青年の認知という 2 つの異なった視点がある。これまで親子両方の視点から研究が行われてきた。

受け取る側である青年の認知について、青年期の適応や青年期発達の変化に伴う親子関係の視点から、Baumrind(1967, 1971)の養育態度理論が用いられて来ており、青年期の発達において養育態度の重要性が指摘されている (Perris, Arindell, & Eisemann, 1994)。例えば、親からの強すぎる統制のような養育態度が自尊感情を低めるとされている (徳田, 1987)。Kazdin (1994) は青年が自分のことを話す際に、親よりも問題があるように報告することがあると述べている。一方で、親側も子どもが青年期に入ると、親は青年に比べてポジティブに家族を評価する傾向がある (Laursen & Collins, 2004) という見解もある。このようなことから、青年期の親子を対象とした養育態度認知を捉えるには、親側・青年側のどちらか一方だけでは不十分であり、母親と青年の両方の視点から検討する必要がある。Bakar, Bornstein, Putnick, Hendricks, & Suwalsky (2007) は、母親と青年の両方の視点から内在的・外在的な問題について検討し、青年の問題行動に関して、親子間の認知的な不一致が大きいことが問題であると示唆している。Holmbeck & O'Donnell (1991) は、親と青年の間に生じる不一致として、態度や行動など認知の不一致を挙げている。このように、対人的認知の枠組みを用いて青年期の母子間の養育態度認知について捉えることは重要である。

そこで、本論文は大別して 2 つの目的から構成した。まず、青年期の母子のペアデータを用いて養育態度が測定できる尺度を作成し、母子の養育態度に関する不一致について対人的な視点から検討する。次に、母子それぞれの実際・期待という個人内の視点から検討する。研究的意義としては、近年も欧米で広く用いられている Baumrind の養育態度理論に基づいた尺度化により、日本でも測定が可能になる。さらに、この尺度は親子の両者に測定可能なものとして作成するため、親子それぞれの養育態度の認知について検討することが可能になる。

そして、母子両者を扱う際には、これまで青年期の親子関係研究ではわずかであった、ペアデータを用いて母子の不一致について検討を行うことができる。また、これまでは養育態度の認知は実際にどのように捉えているのかという「実際」だけであったが、青年期の自律性発達なども考慮し、「期待」という視点を取り込んで養育態度について捉えることは、青年

期の親子関係を捉える上で重要な一助となる。

本論文は、5章から構成される。以下に各章の概要を述べる。

1章 本研究の問題と目的

第1節では、古くから有力な理論として評価されてきた Baumrind(1971, 1996)や Maccoby & Martin(1983)などの養育態度理論について触れ、養育態度の測定方法について概観した。そして、青年期を対象とした養育態度に関する母子の不一致の先行研究とペアデータの重要性について述べた。

また、第2節では母子間の養育態度に関する期待と実際に関する研究について概観した。そして、実際と期待という視点から養育態度を検討する必要性について述べ、それぞれ定義を行った。青年が現在認知している養育態度を「実際」、自分の親がとっている養育態度について、青年自身が望む程度を「期待」とした。親に関しても同様に、親が自分のとっている養育態度について今どのように認知しているかという視点を「実際」、親自身のとる養育態度について親自身が望む程度を「期待」とした。

さらに、第3節では母子の養育態度認知に関連する要因として、親の自尊感情や共感性について述べた。青年の内的な適応として、自尊感情や攻撃性、抑うつや不安について述べた。さらに、親子間の研究では生じることが多い (Hill, Holmbeck, Marlow, Green & Lynch, 1985; Steinberg, Lamborn, Dornbusch, & Darling, 1992; 高橋, 1998) 性差についても述べた。

最後に第4節では、本研究の目的と意義についてまとめた。

2章 青年期の養育態度に関する尺度構成と母子の不一致

第1節では青年と母親を対象として、共通した項目で測定可能な尺度の作成を行った。その結果、親子共通した項目で測定出来る2次元養育態度尺度(親用:DPQ-Pと、子用:DPQ-C)を作成した。2次元養育態度尺度と親子関係診断尺度(EICA; 辻岡・山本, 1976)との妥当性についても検討し、DPQの下位尺度である応答性と、EICAの下位因子である感情的支持について、母子ともに基準関連妥当性が示された。更に信頼性についても検討した。

第2節では、DPQ-Pを用いて養育態度と母親の内的適応である自尊感情や共感性との関連を検討した。その結果、共感性の下位尺度である感情的被影響性と、感情的暖かさの組み合わせによって、養育態度も異なることが明らかになった。特に感情的被影響性(感情的なゆさぶられやすさ)が高いと、応答性が低くなるといった結果が示された。

第3節では、DPQ-Cを用いて、青年の内的適応である自尊感情や攻撃性などの関連を検討した。その結果、養育態度と自尊感情は正の相関が、攻撃性は負の相関があることが示唆された。

そして、第4節では第1節で作成した2次元養育態度尺度を使用し、親子の認知的な不一致について検討した。その結果、養育態度の下位尺度ごとに見てみると、応答性と要求性では親子で一致した部分が異なることが明らかになった。さらに、応答性の方が母子での関連が高いことが示された。第5節でも、親子の認知的な不一致と、青年の自尊感情の関連につい

て検討した。その結果、応答性・要求性ともに母子ともに高い場合が子どもの自尊感情が高くなることが示された。第6節では、性差についても検討した。その結果、男女で異なった結果を示した。特に男子の方が女子よりも多くの関連を示した。

3章 母子による養育態度の実際・期待と青年の内的適応との関連

第1節では、実際と期待の視点から養育態度を測定する尺度を作成した（親用、子用をそれぞれ作成した）。養育態度に関する実際を測定する尺度とは、2章で作成した2次元養育態度尺度（DPQ-P, DPQ-C）である。養育態度に関する期待を測定する尺度は、本章で作成した。2次元養育態度と項目は同一であり、2次元養育態度尺度の教示を変更して実施し、期待に関する2次元養育態度尺度（EX-DPQ-P; EX-DPQ-C）とした。これで、養育態度に関する実際と期待の関連を検討することが可能になった。

そして、第2節では、親の期待・実際と、青年の自尊感情との関連を検討した。その結果、実際と期待の組み合わせにより、応答性が4パターン、要求性が3パターンという、異なったパターンが見出された。くわえて、応答性と要求性ではその組み合わせのパターンによって、自尊感情に異なった結果が示された。応答性・要求性ともに、実際も期待も高いパターンが適応的という結果が示された。

また、第3節では、青年の期待・実際と、青年の内的適応（自尊感情・不安・抑うつ）との関連を検討した。その結果、実際と期待の組み合わせにより、応答性が5パターン、要求性が4パターンという、異なったパターンが見出された。くわえて、応答性と要求性ではその組み合わせのパターンによって、内的適応に異なった結果が示された。応答性については、実際も期待も高いパターンが適応的という結果に加え、実際は高いが期待が低いというパターンも適応的という結果が示された。

4章 母子の養育態度の期待と青年の内的適応との関連

第1節では、親子間での期待と、青年の自尊感情との関連を検討した。その結果、応答性・要求性ともに高く期待する場合に、青年の自尊感情が高くなるという結果を示した。

第2節では、性差について検討した。その結果、男女では女子の方が応答性について高く期待していることが示された。そして期待と内的適応として、自尊感情や抑うつ、特性不安との関連について、男子のほうが女子よりも有意な関連を示すものが多いことが示された。特に、抑うつと特性不安については、女子の方が養育態度の期待とほとんど有意な相関がみられない結果となった。また、親の養育態度の関する期待についても、女子の方が親子間での関連がほとんどみられなかった。

5章 総合考察

前章までに述べられた知見をまとめ、総合考察を行った。まず、第1節では養育態度に関する測定について、本論文で作成した2次元養育態度尺度（DPQ-P, DPQ-C）と期待に関する2次元養育態度尺度（EX-DPQ-P, EX-DPQ-C）を作成した意義について述べた。

次に第2節では、養育態度に関する母子間の不一致について、Baumrindの養育態度理論から応答性と要求性の概念的な違いなどについて考察した。さらに対人的視点からも考察した。養育態度が母子間で関連することや、暖かさを含んだ応答性のほうが、より母子間で関連しやすく伝わりやすいことなどを述べた。

次に、第3節では養育態度に関する実際と期待の視点から、その関連の違いや概念的な違いについて考察した。母子のそれぞれについて個人内の視点から自律性などの概念的視点なども用いて考察した。

第4節では、養育態度に関連する母子の要因として、まず母親の養育態度の先行要因としての共感性と、結果要因としての自尊感情について考察した。共感性は、感情的な暖かさが重要であるが、感情的な影響のされやすさもまた養育態度認知には重要であることが示された。そして、子どもの養育態度と関連する要因として、自尊感情や攻撃性、抑うつや特性不安などについて考察した。

第5節では、養育態度に関する性差について考察した。その結果、母子の認知的な不一致において、要求性でのみ性差がみられた。また、関連要因として検討した不安と自尊感情については性差がみられ、男子のみ養育態度の期待と不安の間に関連がみられた。また、自尊感情については女子のみが養育態度の期待との間に関連がみられた。

最後に、第6節では、今後の課題と研究の展望について述べた。研究の展望として、養育態度の先行要因としての青年の自律性や、母親の不妊について述べた。また、親子の関係性として、間主観性や弁証法的モデル、主体性と資源について述べた。最後に父親研究の重要性についても述べた。